

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24330145

研究課題名(和文) グローバル・シティにおけるホームレスの労働・居住をめぐる国際比較研究

研究課題名(英文) International Comparative Research on Labor, Housing, and Homelessness in Global Cities

研究代表者

山口 恵子 (Yamaguchi, Keiko)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：40344585

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、4つのグローバル・シティ(東京、大阪、マイアミ、マニラ)におけるホームレスの労働・居住をめぐる国際比較研究である。各都市のホームレス層の職業経歴と労働、居住を分析し、都市間の共通性と差異性を抽出し、その原因と意味をグローバル・シティ論の中で解釈する。これにより、都市底辺からみたグローバル化による都市・階層包摂の過程を明らかにし、都市・階層論の展開をめざす。主な調査方法は、路上、シェルター、福祉施設などで暮らす各都市において約25人のホームレス経験者への詳細な聞き取り調査である。グローバリゼーションは大都市において複雑な過程を経て影響を与えており、多面的なホームレス状態がある。

研究成果の概要(英文)：The aim of this project is to study labor and residential experiences of homelessness in four global cities (Tokyo, Osaka, Miami and Manila) using comparative research. It aims to extract the commonalities and differences in homelessness while interpreting them using theories about global cities. The project aims to make clear the process by which globalization contributes to the relegation of homelessness to the bottom of urban society and thus contribute to studies on cities and class. The primary data collection is intensive interviews of 25 persons living in public spaces, shelters, and welfare facilities in each city. Our findings show varied impacts of multiple process of globalization on cities, thus producing various patterns of homelessness.

研究分野：都市社会学

キーワード：ホームレス 貧困 都市 グローバリゼーション 国際比較 犯罪化 社会的排除 空間管理

## 1. 研究開始当初の背景

(1) グローバリゼーションが進行する中、世界の各都市においてホームレス層の増大という現象が報告されてきた。例えば、アメリカ合衆国の諸都市では 1980 年代初頭から、日本の東京や大阪においては 1990 年代中頃からホームレス層の増加が社会問題となっている。「開発途上国」も例外ではなく、フィリピンのマニラでは、2000 年代以降、新しいホームレスの増大が指摘されている。

(2) こうした貧困層の増大をとらえた研究は、ホームレス層の人口、分布等の生態学的な調査研究から始まり、生活史、「精神病理」、社会・経済的条件、労働、移動・居住空間等の調査研究へ進んだ。また、性別や年齢構成、エスニシティなどのホームレス層の集団分化が進むとともに、それらの調査研究へ分化し、さらに、ホームレス救済をめぐる福祉政策、NGO/NPO、社会運動等の調査研究が国内外でさかんに実施されるようになった。ただし、グローバリゼーションが各都市のホームレスの動態に与える影響は一様ではない。それは国際的な比較研究によって、よりクリアになると思われるが、研究が乏しい。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、東京、大阪、マイアミ、マニラの 4 つの大都市の国際比較を通じて、大都市におけるホームレスの動態(どのような階層がどのような過程を経てホームレス状態に至り、ホームレス状態に滞留し、あるいはそこから離脱しているのか)と都市構造の分析を行う。それを通して、グローバリゼーションがホームレスを中心とした都市貧困層に与える影響のヴァリエーションと、その差異をもたらす構造的要因を明らかにすることが本研究の目的である。

ここでのグローバリゼーションとは、1980 年代以降から現代までを対象とする。とりわけ 2008 年のリーマン・ショックを契機とした世界的経済不況のインパクトに留意する。

(2) 本研究の意義は、第一に、各都市においてホームレスに関する研究は多く存在するが、より現代の変化を捉えた研究は少ない。経済変動の中で、新たなタイプのホームレスが生れ、労働と居住にも新たな動向が生じており、その構造と動態を捉えることができる。

第二に、国際的な都市間比較の意義である。従来のホームレス研究は、一国規模のものが多く、国際比較研究も存在するが、「先進国」間での比較や各国の紹介に終わるものも少なくない。ここでは「先進国」間の比較(東京・大阪とマイアミ)、「先進国」と「途上国」間の比較(東京・大阪・マイアミとマニラ)の比較、「先進国」内での比較(東京と大阪)と複数の比較軸を設けることで、より詳細な分析を行う。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究では、4 つの都市を研究対象として設定した。S. サッセンが触れたように世界のグローバル・シティの一つである日本の東京、東アジア経済圏の中心で大規模な寄せ場がある大阪、南フロリダ都市圏にあって、ラテンアメリカ経済圏の結節都市であり、ヒスパニック層が高い割合を占めるアメリカのマイアミ、東南アジア経済圏の一角をなし、典型的なプライメイトシティでスラム・スクワッターが広がるフィリピンのマニラである。

(2) ここで対象とするホームレスとは、恒常的な家や住所がない状態や、ときにそのような状態にある人々を指している。直接の調査対象は、主に路上や公園などの屋外で路上生活(野宿)をしている(ストリートホームレス)、シェルターや施設、病院などの施設で寝泊まりしている(シェルターホームレス)、行政や NGO/NPO などの援助を受けながらアパートなどに住んでいる元ホームレス(元ホームレス)の三層を想定した。

(3) 本研究の主なデータ収集の手法は、インタビュー調査である。各都市において研究チームを作り、約 25 人のホームレス経験者に対して半構造化インタビュー調査を行った。調査時期は 2013 年 5~11 月である。インタビューは、全都市である程度統一になるように主な質問項目(家族・生育歴、職業・居住歴、はじめてのホームレス経験、現在の生活状況、ハラスメント経験や都市の評価、境遇の認知等)を設定した。1 人あたり 1~3 時間のインテンシブな聞き取りとなった。調査協力者は、施設などの機関からの紹介、支援者からの紹介、路上や活動時における直接の協力依頼などによって確保した。結果的に聞き取り調査では、東京 25 人、大阪 28 人、マイアミ 29 人、マニラ 29 人から協力を得た。そのほか、関係機関への聞き取りや、既存の資料・統計分析などもあわせて行っている。

(4) 分析は第一に、各都市においてホームレス状態にある人々への聞き取りデータについて、属性、生育過程、路上への析出過程、路上生活、路上からの退出過程を整理し、そのパターンを構成する。第二に、そのパターンから都市ごとのホームレスの類型化を行う。第三に、その各都市固有の類型は何を意味するのか、ホームレスが埋め込まれた都市の類型化を行う。第四に、ホームレスの類型と都市の類型について、その類似性と差異性について比較分析を行う。

## 4. 研究成果

本研究の成果については、後述するように書籍の発行を目指して、各都市において分析を継続している段階である。ここでは暫定的なものであるが、比較から各都市の特徴についてまとめる。

### (1)ホームレスの類似性と差異性について

属性のパターンにおいて、東京と大阪は単身で中高年男性が典型的であるが、若年層も増えている。マイアミは、若年・中年が多く、エスニシティや移民経験が多様で、女性や家族も一定の割合存在する。一方、マニラは最も若年・中年が多く、性別は多様で、拡大家族を含めたファミリー層が多い。

ホームレス状態への析出過程（生育歴・職業履歴・居住履歴のパターン）において、4都市での類似性として、その多くが低学歴で、非正規雇用のブルーカラー職およびサービス業の低賃金職（インフォーマルセクターを含む）に従事してきたことが指摘できる。同時に居住が不安定化していることも共通している。差異性に注目すると、東京では建設業従事者は一貫して多いが、非正規雇用で製造業やサービス業などに従事してきた者も増えている。大阪では寄せ場を通じて建設日雇労働などに従事した経験を持つものが多い。東京と大阪において増加が指摘されている若年層については、家族関係の悪化や派遣労働者の比重を増していた製造業への経済危機の影響もみられる。マイアミでは、ゲッター出身者で、メンタル・フィジカルなディスアビリティを経験している者が多い。また全般的な背景にアフォードブルな住宅の欠如がある。またマニラは、スクオッターの撤去によるホームレス化が最も典型的で、そのほか親が路上で生活していたケース（世代間再生産）や、先住民など地方や近郊から流入して路上生活を送るケースもある。

ホームレス生活のパターン（ここでは路上生活のみを取り上げる）において、4都市で類似しているのは、多くの人々がパブリックスペースから排除されたり家屋や所有物を撤去されたりした経験を持っていることである。差異性に注目すると、東京・大阪、マイアミは路上生活の期間が短くなる傾向があり、路上生活そのものが減少している。一方、マニラは親の代からの路上生活や拡大家族もあり、相互の関係が緊密である。多くは都市インフォーマルセクターで働いている。

ホームレス状態からの退出過程（制度利用のパターン）については、東京と大阪は公的制度や民間組織の支援を利用した経験を持つ者がほとんどである。また、施設やアパートでは基本的には就労が求められる。マイアミでもローカルレベルでホームレス税が導入されるなどのセーフティネットが増え、プログラムの利用によってストリートからシェルターへ移行するホームレスが増加した。東京・大阪・マイアミとも、制度を繰り返し利用している者が一定程度存在する。一方、マニラでは食事サービス（炊き出し）などの民間支援組織の利用はあるが、公的制度の利用はほとんどなく、路上からの退出は少ない。

### (2)グローバル化とホームレス化

各都市にほぼ共通しているのは、グローバル化（経済のサービス化）や非正規化による下降圧力と失業の高まりである。さらに、＜空間構造＞におけるパブリックスペースの管理・排除の強化も共通していた。どの都市でも条例や法律が強化され、ストリートホームレスのクリミナライゼーション（犯罪化）が進行している。しかし都市ごとに差異もあり、複雑な様相が見られる。

東京と大阪は、＜労働市場＞において建設業の吸収力が弱体化し、製造業やサービス業などにおいて非正規雇用が増大している。＜社会政策＞においては、全般的には「小さな政府」化（ネオリベラル化）が進行する中、旧来からの生活保護の限定的運用を補完する形で1990年代以降、ホームレス特別対策が創設された。他方、2008年の経済危機の前後から生活保護の適用も拡大し、その結果、ストリートホームレスが減少し、シェルターホームレスが増加した。また、一部は生活保護を利用したアパート居住へと移行している。＜空間構造＞においては、ジェントリフィケーションの直接的な影響は限定的である。

マイアミでは、＜労働市場＞において不安定な低賃金サービス業が明らかに増大している。また＜空間構造＞ではジェントリフィケーションなどの影響もあり、アフォードブルな住宅の欠如が顕著である。＜社会政策＞においては、ネオリベラル化のもとセーフティネットが縮小したが、2008年の経済危機以降、再び包摂プログラムの拡充・利用が進み、ストリートホームレスは激減している。一方、ゲッター出身者は一貫して顕著な不利益を受けており、とりわけマイアミでは移民層との競合などで状況が厳しくなっている。

マニラは、スラムやスクオッターなどに暮らす都市貧困層が厚く存在しており、当然そこにはファミリー層も含まれる。そこに資本の土地投機と公有地の民営化による都市再開発が進み、ジェントリフィケーションを含む大きな＜空間構造＞の変容を経験している。とりわけスクオッターの撤去が拡大したが、＜社会政策＞はほぼないことから、ストリートホームレスが増加した。また、＜労働市場＞においてサービス経済が膨張したことから、路上での生活機会が増加したこともプル要因となっていると考えられる。

### (3)今後の課題

以上のように、グローバル化は大都市において複雑な過程を経て影響を与えており、人々のホームレス化にはヴァリエーションがみられた（多元的ホームレス化）。そうしたヴァリエーションをもたらす構造的要因を踏まえ、都市類型として示すことが、本研究の最終的な課題であると考えている。

本研究は日本語および英語での書籍の出版を目指しており、今後いっそうの分析と執筆を行っていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 20 件)

後藤広史、生活保護受給者が利用する法定外施設の課題 届出/無届を規定する要因、貧困研究、査読有、12号、2014、109-119

後藤広史、ホームレス状態から「脱却」するための「場」 その役割と普遍性、月刊福祉、査読無、97/7、2014、54-55

Kiener, Johannes, Social Networks of Homeless People under the Influence of Homeless Self-Sufficiency Support Centres in Japan, Journal of East Asian Studies, refereed, 5, 2014, 77-105

水内俊雄、白波瀬達也、キナー・ヨハネス、コルナウトスキ・ヒュラルド、大阪における生活困窮/ホームレス状況の人々をめぐるハウジング調査の系譜とその展開、貧困研究、査読無、13号、2014、76-89

白波瀬達也、あいりん地域における居住支援 ホームレス支援の新たな展開と課題、理論と動態、査読有、7号、2014、75-90

Aoki, Hideo, Pathways to Street and Spatial Politics on Homelessness in Metro Manila: In the Context of a Global City of Developing Country, 理論と動態、査読有、6号、2013、114-139

後藤広史、生活保護基準引き下げ・法改正による国民生活への影響、社会運動、査読無、405号、2013、30-33

北川由紀彦、<ホームレス対策>の展開過程 東京(区部)における「厚生関係施設」と「路上生活者対策」に注目して、放送大学研究年報、査読無、30号、2013、41-53 <http://lib.ouj.ac.jp/nenpou/no30/30-5.pdf>

Marr, Matthew D. y Abel Valenzuela, Jr., Vínculos sociales y subsistencia en los 'Templos de refugio' en Japón: Una exploración de las influencias en la situación de calle entre los jornaleros de los yoseba en Tokio, (Social Ties and Survival in Japan's 'Temples of Refuge': An Exploration of Influences on Homelessness among Yoseba Day Laborers in Tokyo), Tabula Rasa, non-refereed, 18, 2013, 77-102 (in Spanish)

白波瀬達也、岐路に立つあいりん地域の多層的セーフティネット、生存学、査読無、6号、2013、319-335

山口恵子、現代における流動する若年派

遣労働者の労働・生活、寄せ場、査読無、26号、2013、40-61

吉田舞、都市先住民のネットワーク フィリピン・マニラの事例から、部落解放研究、査読有、19号、2013、141-161

青木秀男、ホームレスの国際比較のための方法序説 フィリピン、日本、アメリカを事例に、理論と動態、査読有、5号、2012、128-149

Marr, Matthew D., ロサンゼルスと東京における脱ホームレス経路とそのコンテキストの比較研究、ホームレスと社会、査読無、6巻、2012、74-81

渡辺拓也、求人広告市場を利用する飯場の労働実態 X 建設での参与観察をもとに、市大社会学、査読有、13号、2012、35-51

〔学会発表〕(計 34 件)

山口恵子・北川由紀彦、グローバリゼーションとホームレスの国際比較研究 (1) 全体の枠組みと東京の事例第、87回日本社会学会大会、2014年11月22日、2014年11月22日、神戸大学(兵庫)

渡辺拓也・白波瀬達也、グローバリゼーションとホームレスの国際比較研究 (2) 大阪における28人の聞き取り調査から、第87回日本社会学会大会、2014年11月22日、神戸大学(兵庫)

吉田舞、グローバリゼーションとホームレスの国際比較研究 (3) マニラのホームレスの析出過程とストリート生活、第87回日本社会学会大会、2014年11月22日、神戸大学(兵庫)

Marr, Matthew D., Recovery Zone? Preliminary Findings from a Qualitative Study of Overtown, Miami's Emerging Service Hub, East Asian Regional Conference on Alternative Geography, July 23 2014, Osaka City University, Osaka

Marr, Matthew D., Changing Patterns of Homelessness and Marginality in Glocalizing Tokyo, International Sociological Association World Congress of Sociology in Yokohama, July 18 2014, PACIFICO Yokohama, Kanagawa

白波瀬達也、住宅弱者の居住支援 あいりん地域における社会的企業の取り組みを事例に、福祉社会学会第12回大会、2014年6月28日、東洋大学(東京)

白波瀬達也、単身高齢者に向けた甲いの

実践 あいりん地域を事例に、宗教と社会学会第 22 回大会、2014 年 6 月 21 日、天理大学（奈良）

後藤広史、「ホームレス」と自立支援  
「実質的な脱却」に向けた支援とその方法、  
日本社会福祉学会関東地域部会研究大会、  
2014 年 3 月 1 日、日本社会事業大学（東京）

北川由紀彦・後藤広史・小池隆生・Marr, Matthew D.・松本一郎・村上英吾・山口恵子、  
東京 25 ケースから見えてくること、グローバルホームレス研究会主催「グローバル・シティにおけるホームレスの国際比較」シンポジウム、2013 年 12 月 15 日、日本大学文理学部（東京）

Marr, Matthew D.・Karen Mahar・Alejandro Angee “Homelessness in Global Miami: A Preliminary Analysis of Qualitative Interviews”, グローバルホームレス研究会主催「グローバル・シティにおけるホームレスの国際比較」シンポジウム、2013 年 12 月 15 日、日本大学文理学部（東京）

白波瀬達也・渡辺拓也・Kiener, Johannes・富永哲雄、大阪のホームレス 28 人の聞き取り調査から、グローバルホームレス研究会主催「グローバル・シティにおけるホームレスの国際比較」シンポジウム、2013 年 12 月 15 日、日本大学文理学部（東京）

吉田舞・青木秀男・Lagman, John M. Francis・Cabredo, Frederico L. フィリピン・マニラのホームレス、グローバルホームレス研究会主催「グローバル・シティにおけるホームレスの国際比較」シンポジウム、2013 年 12 月 15 日、日本大学文理学部（東京）

後藤広史、無届入所施設調査 1 届出/無届を規定する要因、貧困研究会第 6 回研究大会、2013 年 11 月 10 日、日本福祉大学（愛知）

Marr, Matthew D., Exiting Homelessness in the Housing First Era: An Analysis of Homeless Management Information System (HMIS) Data in Miami-Dade County, invited presentation at the Moving Forward, Moving Home conference sponsored by the Southeast Institute on Homelessness and Supportive Housing, October 1 2013, St. Petersburg, FL

後藤広史、「ホームレス」と自立支援  
「実質的な脱却」に向けた支援とその方法、  
東洋大学社会福祉学会第 9 回大会、2013 年 8 月 4 日、東洋大学（東京）

Marr, Matthew D., アメリカの社会（無）

保障 貧困、公的扶助、ホームレス問題、  
日本大学文理学部社会福祉学科（招待講演）  
2013 年 7 月 26 日、日本大学（東京）

渡辺拓也、ホームレスと共同性、関西社会学会第 64 回大会、2013 年 5 月 18 日、大谷大学（京都）

松本一郎・宮崎伸一・田中俊夫・鈴木伸、  
いわゆる「ドヤ街」の精神科医療 横浜市  
寿町地区の診療所の役割、社会精神医学会第  
32 回大会、2013 年 3 月 8 日、KKR ホテル熊本  
（熊本）

松本一郎、近年の最低生活費に関する調査の成果と課題、貧困研究会第 23 回定例研究会、2013 年 2 月 27 日、日本大学経済学部（東京）

吉田舞、都市先住民とエスニック・ネットワーク マニラ首都圏の事例から、アジア社会学研究会、2012 年 12 月 9 日、椋山女学園大学（愛知）

⑲ 吉田舞、都市先住民と労働 グローバル都市マニラの事例から、第 85 回日本社会学会大会、2012 年 11 月 4 日、札幌学院大学（北海道）

⑳ Aoki, Hideo, Street Homeless in Metro Manila: Pathway to Street, Definition and Politics On Street, 11th Conference of Asian Pacific Sociological Association, October 22 2012, Ateneo de Manila University, Philippines

㉑ Kitagawa, Yukihiko, Development of Homelessness Policy in Tokyo: Focusing on Governance, 11th Conference of Asian Pacific Sociological Association, October 22 2012, Ateneo de Manila University, Philippines

㉒ Yamaguchi, Keiko, Studying Homelessness: The Significance of International Comparative Approach, 11th Conference of Asian Pacific Sociological Association, October 22 2012, Ateneo de Manila University, Philippines

㉓ 松本一郎、低所得者の食費構造、貧困研究会第 5 回研究大会、2012 年 9 月 30 日、北海道教育大学（北海道）

㉔ 後藤広史・川村岳人・小松理佐子・熊田博喜・楓町大祐、「不定住の貧困」に対応するための地域福祉の実践的課題（その 1）  
対象と対応の類型、日本地域福祉学会第 26 回全国大会、2012 年 6 月 10 日、熊本学園大学（熊本）

⑳ 白波瀬達也、あいりん地域における新たな福祉課題 単身高齢社会における孤立と死、福祉社会学会第10回大会、2012年6月2日、東北大学(宮城)

〔図書〕(計6件)

Marr, Matthew D., Better Must Come: Exiting Homelessness in Two Global Cities, 2015, Cornell University Press, 1-223

Marr, Matthew D., Promises and Pretenses of Declining Street Homelessness in the United States and Japan: A Human Security Perspective, Makoto Maruyama and Sangmin Bae (Eds.) Human Security, Changing States, and Global Responses: Institutions and Practices, 2015, New York, Routledge, 135-154

青木秀男、マニラの都市底辺層 変容する労働と貧困、2013、大学教育出版、1-207

後藤広史、ホームレス状態からの「脱却」に向けた支援 人間関係・自尊感情・「場」の保障、2013、明石書店、1-198

小池隆生、格差/貧困拡大期におけるホームレス問題とその論点、河合克義編著『福祉論研究の地平 論点と再構築』、2012、法律文化社、第3章

〔その他〕

Marr, Matthew D., "Housing First, Not Police First," Miami Herald Op-Ed, November 1, 2013.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山口 恵子 (YAMAGUCHI, Keiko)  
東京学芸大学・教育学部・准教授  
研究者番号：40344585

### (2) 研究分担者

後藤 広史 (GOTO, Hiroshi)  
日本大学・文理学部・准教授  
研究者番号：60553782

北川 由紀彦 (KITAGAWA, Yukihiro)  
放送大学・教養学部・准教授  
研究者番号：00601840

小池 隆生 (KOIKE, Takao)  
専修大学・経済学部・准教授  
研究者番号：40404826

松本 一郎 (MATSUMOTO, Ichiro)  
大正大学・人間学部・専任講師

研究者番号：30459961

村上 英吾 (MURAKAMI, Eigo)  
日本大学・経済学部・准教授  
研究者番号：30366637

白波瀬 達也 (SHIRAHASE, Tatsuya)  
関西学院大学・社会学部・助教  
研究者番号：40612924

青木 秀男 (AOKI, Hideo)  
特定非営利活動法人社会理論・動態研究所・所長  
研究者番号：50079266

吉田 舞 (YOSHIDA, Mai)  
特定非営利活動法人社会理論・動態研究所・研究員  
研究者番号：50601902

### (3) 研究協力者

Johannes Kiener  
大阪市立大学・大学院文学研究科人間行動学専攻地理学分野・博士後期課程

富永 哲雄 (TOMINAGA, Tetsuo)  
大阪市立大学・大学院文学研究科人間行動学専攻地理学分野・博士後期課程

渡辺 拓也 (WATANABE, Takuya)  
大阪市立大学・大学院文学研究科都市文化研究センター・研究員

Matthew D. Marr  
Florida International University,  
Department of Global & Sociocultural  
Studies, Assistant Professor of  
Sociology

Alejandro Angee  
Miami Dade College, Social Sciences  
Department, Assistant Professor of  
Sociology

Karen M. Mahar  
Camillus House, Vice President of  
Strategy Management

LeTania Paulina Severe

Frederico L. Cabredo  
Kanlungan sa Er-Ma Ministry Inc.,  
Social worker

John F. Lagman  
PAKISAMA, Knowledge Management  
Officer